

フローベールの半過去について

小 林 正 憲

フローベールの小説の中で半過去が他の動詞の時制にくらべてずっと重要な役割を与えられていること、またそれらの働きにそれまでの小説におけるのとは著しく違ったニュアンスがあることは容易に気付かれることである。このことは恐らく小説という芸術が創作者の意識と外的世界との関連においてとげようとしていた著しい変容の現れであった。だからこの方向に小説を押し進めようとしたブルーストがフローベールの半過去の特異さに最初に気づいたことは当然であった。彼はティボーデのフローベール論に対する反駁文の中で、「感情教育」の中の半過去のある働きについてこう述べている。「この半過去は文学においてじつに新しいもので、ちょうどいつもと違った場所に置かれたランプだとか、新しい家、あるいは古くても引越してしまってほとんどがらんとしている家についた時のように、事物や人物の様相を根底から変えているのである。¹⁾」

しかしこの言葉の中でブルーストが指摘しているのは、フローベールの半過去がそのあらゆる機能によって現実のヴィジョンを一新しているということではない。ブルーストが全く新しいものであると称讃している半過去とは自由間接話法において使用されている半過去なのである。ところが実際はこのような半過去はフローベールの半過去の種々の働きの中の一つに過ぎない。フローベールの小説の中で——特に著しいのは「ボヴァリ夫人」であるが——他の動詞の時制に対して半過去が圧倒的に数多く使用されているのであるが、これらの半過去が独特なものであるということは、彼がそれらに従来の小説の半過去と全く違った機能を与えているという意味ではなく、彼がこれらの半過去を用いることによって、現実についての新しいヴィジョン、或いは作品の中の世界を形成する新しい方法を生みだしているという意味である。伝統的な小説における半過去とフローベールのそれとがどんなに違うものであるか次の二つの引用文からある程度うかがわれよう。

(1) La nuit tombait; le soleil venait de disparaître; le

grand silence du désert n'était troublé que par les sanglots d'une jeune femme arabe qui, assise près de sa tente, semblait anéantie; de grosses larmes s'échappaient de ses yeux rougis par trois nuits de veille; ses enfants, groupés autour d'elle, silencieux et graves, contemplaient leur mère sans oser la questionner; les yeux de ces chérubins semblaient refléter la profonde douleur de leur mère: ils étaient tristes parce qu'elle pleurait.

Tout à coup, la jeune femme se redressa et interrogea l'horizon; son beau visage s'éclaira d'un rayon d'espoir.

L'arabe et son cheval de Lamartine²⁾

- (2) Le 15 septembre 1840, vers six heures du matin, la *Ville-de-Montereau*, près de partir, fumait à gros tourbillons devant le quai Saint-Bernard.

Des gens arrivaient hors d'haleine; des barriques, des câbles, des corbeilles de linge gênaient la circulation; les matelots ne répondaient à personne; on se heurtait; les colis montaient entre les deux tambours, et le tapage s'absorbait dans le bruissement de la vapeur, qui, s'échappant par des plaques de tôle, enveloppait tout d'une nuée blanchâtre, tandis que la cloche, à l'avant, tintait sans discontinuer. L'Education Sentimentale, p.1³⁾

(1)の引用文の中の半過去は伝統的な物語における半過去の働きの代表的なものと考えられよう。このような半過去は物語の発展を一時停止させ、行為の繰りひろげられる場面の背景や周囲の状況を描き出すためのものである。これは芝居の舞台の背景のようなもので、物語の発展を支える補助的な役割を持っているにすぎない。これに対してフローベールの文章においては、その場面における人物たちの動作を含めて、あらゆる動きが半過去で描かれている。もちろんフローベールの小説の中でも作中人物たちの動作を表わすための単純過去も用いられているが、それは従来の小説におけるのとは逆に、フローベールにおいては半過去で描写される場面と場面をつなぐ二次的な役割を与えられている場合が多い。実際フローベールの小説は半過去で描写される場面の連続が作品の主要な部分を占めている。従ってフローベールにおいて半過去の役割はもはや補助的なものではなく、作品の世界の実体そのものを形成しているといえることができる。

フローベールの用いた半過去をその機能によって分類すると次のようになる。

I. 描写の半過去。時間の流れの中のある瞬間の状況を描写する。作中人物や事物の動きは持続の相において捉えられる。

- (1) Les ombres du soir descendaient; le soleil horizontal, passant entre les branches, lui éblouissait les yeux. Ça et là, tout autour d'elle, dans les feuilles ou par terre, des taches lumineuses tremblaient, comme si des colibris, en volant, eussent éparpillé leurs plumes. Le silence était partout; quelque chose de doux semblait sortir des arbres; elle sentait son coeur, dont les battements recommençaient, et le sang circuler dans sa chair comme un fleuve de lait.

Madame Bovary, p.150

- (2) Les rues étaient désertes. Quelquefois une charrette lourde passait, en ébranlant les pavés. Les maisons se succédaient avec leurs façades grises, leurs fenêtres closes; et il songeait dédaigneusement à tous ces êtres humains couchés derrière ces murs, qui existaient sans la voir, et dont pas un même ne se doutait qu'elle vécut! Il n'avait plus conscience du milieu, de l'espace, de rien; et, battant le sol du talon, en frappant avec sa canne les volets des boutiques, il allait toujours devant lui, au hasard, éperdu, entraîné. L'Education Sentimentale, p. 50

II. 習慣の半過去。過去のある期間に繰り返された行為を表わす。

- (1) Léon, deux fois par jour, allait de son étude au *Lion d'or*. Emma, de loin, l'entendait venir; elle se penchait en écoutant; et le jeune homme glissait derrière le rideau, toujours vêtu de même façon et sans détourner la tête. Mais, au crépuscule, lorsque, le menton dans sa main gauche, elle avait abandonné sur ses genoux sa tapisserie commencée, souvent elle tressaillait à l'apparition de cette ombre glissant tout à coup. Elle se levait et commandait qu'on mît le couvert. Madam Bovary, p.91

- (2) A partir de ce jour-là, Arnoux fut encore plus cordial qu'auparavant; il l'invitait à dîner chez sa maîtresse, et bientôt Frédéric hanta tout à la fois les deux maisons. Celle de Rosanette l'amusait. On venait là le soir, en sortant du club ou du spectacle; on prenait une tasse de thé, on faisait une partie de loto; le dimanche, on jouait des charades; Rosanette, plus turbulente que les autres, se distinguait par des inventions drolatiques, comme de courir à quatre pattes ou de s'affubler d'un bonnet de coton.

L'Education Sentimentale, p.144

次のような半過去はフローベール独特のもののように思われる。次の引用文で始まる「ボヴァリ夫人」の第三部、第五章の大半は同様な半過去で語られているのであるが、これらは一見ある木曜日に起った一回だけの出来事を順次描いているように見えるが、時々繰り返される *souvent* という副詞によってそれらがやはり木曜ごとに繰り返される行為を描写していることがわかるのである。

- (3) C'était le jeudi. Elle se levait, et elle s'habillait silencieusement pour ne point éveiller Charles, qui lui aurait fait des observations sur ce qu'elle s'apprêtait de trop bonne heure. Ensuite elle marchait de long en large; elle se mettait devant les fenêtres et regardait la Place. Le petit jour circulait entre les piliers des halles, et la maison du pharmacien, dont les volets étaient fermés, laissait apercevoir dans la couleur pâle de l'aurore les majuscules de son enseigne. Madame Bovary, p.243

Ⅲ. 作中人物の意識を描写する半過去。以上の半過去が外的な現実を表わすのに対してこれは内部の現実を伝えるものである。

- (1) Emma ne dormait pas, elle faisait semblant d'être endormie; et, tandis qu'il s'assoupissait à ses côtés, elle se réveillait en d'autres rêves.
 Au galop de quatre chevaux, elle était emportée depuis huit jours vers un pays nouveau, d'où ils ne reviendraient plus. Ils allaient, ils allaient, les bras enlacés, sans parler. Souvent, du haut d'une montagne, ils apercevaient tout à coup quelque cité splendide avec des dômes, des ponts, des navires, des forêts de citronniers et des cathédrales de marbre blanc, dont les clochers aigus portaient des nids de cigognes. Madame Bovary, p.183

- (2) L'idée de se marier ne lui semblait plus exorbitante. Ils voyageraient, ils iraient en Italie, en Orient! Et il l'apercevait debout sur un monticule, contemplant un paysage, ou bien appuyée à son bras dans une galerie florentine, s'arrêtant devant les tableaux. Quelle joie ce serait que de voir ce bon petit être s'épanouir aux splendeurs de l'Art et de la Nature! Sortie de son milieu, en peu de temps, elle ferait une compagne charmante. La fortune de M. Roque le tentait, d'ailleurs. Cependant, une pareille détermination lui répugnait comme une faiblesse, un avilissement.

L'Education Sentimentale, p.255

IV. 話し言葉を伝える自由間接話法の半過去。プルーストが文学においてじつに新しいものと称賛したのはこれである。その時ティボーデはラ・フォンテーヌの中に同様な半過去が見出されることを指摘してプルーストの称賛に根拠のないことを明らかにしようとしたのであるが、⁴⁾ 後に書いた「ギュスターヴ・フローベール」の中でプルーストがやはり正しかったことを認めている。ティボーデによれば「我々の文法書の著者たちはみんな例外なくこれを知らなかった」ということである。彼はまたスイスの言語学者 Bally の論文を援用して、例外的なラ・フォンテーヌの場合を除けば、このような半過去はルソーの「告白」と「コロンバ」の中に散見されると述べている。⁵⁾ いずれにしてもフローベールが始めて小説において意識的にある効果をねらってこれを用いたことは確かである。

(1) Au nom du pharmacien, elle s'emporta. Cependant, il accumulait de bonnes raisons; ce n'était pas sa faute, ne connaissait-elle pas M. Homais? Pouvait-elle croire qu'il préférât sa compagnie? Madame Bovary, p. 261

(2) Il commença par demander du pain de ménage (le plus ferme possible), et, à ce propos, parla des meurtres de Buzançais et de la crise des subsistances.

Rien de tout cela ne serait survenu si l'on protégeait mieux l'agriculture, si tout n'était pas livré à la concurrence, à l'anarchie, à la déplorable maxime du « laissez faire, laissez passer »! Voilà comment se constituait la féodalité de l'argent, pire que l'autre! Mais qu'on y prenne garde! le peuple, à la fin, se lassera, et pourrait faire payer ses souffrances aux détenteurs du capital, soit par de sanglantes proscriptions, ou par le pillage de leurs hôtels. L'Education Sentimentale, p. 138

次にフローベールの小説の中で半過去がこのように支配的な役割を果たしているのはなぜか、それはフローベールの抱いている小説についての考え方やどんな関係があるのか考えてみよう。上に分類した半過去のうち I と II、すなわち持続の状態を表わす半過去と習慣的な行為を表わす半過去は、一見性質が全く違うもののように見えるが、次の点で本質的な共通点がある。第一の半過去は時間の流れの中である一つの瞬間を切りとって定着するもので、その瞬間は停止したものとして表現される。第二の半過去は一

つの瞬間を切りとるかわりに、もっとひろがりのある時間、一つの期間を切りとって、その期間内の継続的な行為、すなわち習慣的な行為を伝える働きをしている。両者に共通しているのは人間の生活を、持続の中の一時点でとらえて再現しているという点である。違うのはその時点の時間の幅だけである。このように、ある人間の生涯を物語る時に、フローベールは、その人物の行為の急速な展開を追ってゆくのではなく、その人物の持続の中のある現在をとらえ——その現在は一瞬間かも知れないし、一時期であるかも知れない——それを定着させ、積み重ねることによって物語っているのであるが、彼がこのようなやり方を彼独自の小説の方法として確立したのは、「ボヴァリ夫人」を書いた時である。そしてこの小説の構想そのものが現実のこのような捉え方を必要とし、従って半過去の支配的な役割を必然的なものにしたことは疑いなし。「ボヴァリ夫人」を書いていた時、彼は次のような言葉を述べている。「私にとって美しいと思われるもの、私がやりたいこと、それは何についてもない本、外的な結びつきをもたない本、その文体の内的な力によって一人で立っているような本である。⁵⁾」またこうも書いている。「私は生きるためには空気を吸っていれればいいのと同じように、文章を書いていれればいいような本を書きたい⁶⁾」。これらの言葉の意味はいろいろ考えられるが、ロマン主義的な、告白的な要素を排除して、一切の素材を外の世界に求めようとする意図と、バルザックの小説のような構成的な小説——そのような小説では結末へ向う急速な動きが支配的なのであるが——そういう小説とは反対に、物語の筋に主眼を置かず、現在の描写を積み重ねることによって完成されるような作品を書きたいという意図、これら二つの意図の表われと考えることができよう。友人のブイエとデュ・カンの示唆によって着想した「ボヴァリ夫人」の構想はこのような意図を実現するのに都合のいいものであった。この小説においては、一人の女主人公の冒険が、少なくとも最初の構想においては、第一の問題になっているというよりは、「田舎の風俗」という副題がついているように、フランスのある田舎の生活を描くことが主要な課題なのである。フローベールの小説に多く見られる田園や町の風景の描写に関して、それが作中人物の行動とは何の関係もなく、ただ作者によって眺められているにすぎないとか、そのような描写は時間の流れを停止させるものであるといった批判がしばしばなされた。しかしこのように批難されている点こそフローベールの企てていることなのである。彼にとっては作品全体の構成よりも一つの文章の方が、ドラマ全体よりも一つの場面の方が重要で

ある。彼の熱中するのは画面の構成である。主人公すらこの画面の中の多くの対象の一つに過ぎない。ここから描写の時制、半過去の支配的な役割が生じる。

半過去の本質的な性質は何かという点について色々な説があるが、その最も代表的なものは過去における動作の進行、あるいは継続する状態を表わすというものである。これを話し手と半過去によって表現される対象との関係という点から考えてみよう。ある対象を持続の状態において表現する時、話し手がその対象の前に、その時現存していたということが前提となっている。あらゆる種類の半過去は話し手の存在を中心としたパースペクティブをなしていると考えられる。従って半過去は本来一人称による叙述の中で用いるのが自然な用法であると考えられる。フローベールの小説の中の半過去が特異な感じを我々に与える一つの理由は、語り手の意識の中で展開される一人称体の中では、(例えばブルーストの小説のように)安定した自然な感じを与える半過去が、中心的な視点となるべき一人称の語り手をもたない物語を支配しているという点にある。伝統的な三人称体の物語では単純過去によって叙述される筋の発展に読者の注意は集中され、半過去は所々で補助的な役割をしているだけだからこのような感じは起らないのだろう。

ところでフローベールは「ボヴァリ夫人」を一人称、すなわち nous によって物語り始めている。学校時代をシャルル・ボヴァリと一緒に遇した誰かが当時を回想しているという形式である。ところがこの語り手 nous はいつの間にか消えてしまっている。このことは彼が、この小説で自分のやろうとしていること、すなわち半過去によって対象を絶えず現在の相において捉える描写の積み重ねによる田舎の生活の再現、これはもともと一人称の形式を要求するということを最初は感じていたことを示している。彼が一人称の形式をすぐに放棄したのは、それが、彼の描こうとしている世界にとってあまりに狭い枠になると考えたからであろう。このように中心的な視点を小説の内部から外部へ移したために、フローベールの半過去には一種の独特な不安感がつきまわっているのだが、そのかわりに作者にはいくつかの利点が生じる。第一に空間的な視野が広がること、第二に物語の中のドラマにまき込まれなくて冷静な描写ができること、第三に外的な世界だけでなく、作中人物たちの心の内部をも描写できること。フローベールの小説に多く見出すことのできる内的独白を表現する半過去はこの第三の点から生じている。フローベールにおいては心の内部も外の世界と同

じように描写の対象となっている。そして同じように半過去が用いられている。作中人物の思考の内容を表現するためには、その人物の考えた言葉をそのまま直接的に表現する方法がある。フローベールはなぜそうしないで半過去を用いて間接的に表現するのだろうか。スタンダールは直接的な内的独白の表現をしばしば用いているが、その時は必ず引用符を用い、*se disait-il*, *pensa-t-il* といった導入の語句を伴っている。フローベールは外的な現実であれ、内的な現実であれ常に持続の状態表現しようとしているのであるが、このような導入の語句は彼のねらっている持続の感覚を損ねる傾向がある。そのような語句を取り払った方がばくぜんとした時間のひろがりをよく感じさせることができる。またフローベールは小説の外にある作者の視点をできるだけ読者に意識されまいと願っているのだが、導入の語句のない方が作中人物の存在の独立性を強めることができる。プーストとティボーデは話し言葉を伝える半過去の独創性を問題にしたのであるが、思考の内容を伝える半過去も同じように独創的なもので、それを小説の中で一貫して用いたのはフローベールが恐らく最初であろう。

話し言葉を表現する自由間接文体の半過去に関して、フローベールがどのようにしてこの表現方法に達したのかということ、ティボーデは次のように説明している。第一にフローベールは「文法的に半過去の人間」であるから、半過去からそのあらゆる働きを引き出したのは当然である。第二にフローベールはある種の国語の表現を同化することによってフランス語の文体を豊かにしたのである。⁷⁾ しかし先に述べたような理由でフローベールが思考の内容を間接的に描写する方法に到達したとすれば、外に現れた思考、すなわち話し言葉をも同じ方法で表現することを考えついたのは当然であったとも考えられよう。フローベールが思考を伝える半過去を会得した後に言葉を伝える半過去へと移ったということは次の事実によっても示されるだろう。すなわち「ボヴァリ夫人」の中では、思考を伝える半過去は作品全体に一貫してかなり数多く用いられているが、会話を表現する自由間接話法の半過去は作品の後半の部分でわずかに三、四個所用いられているだけである。ところが「感情教育」では会話を伝えるのに直接話法の代りに自由間接話法が非常にひんばんに用いられている。しかも「ボヴァリ夫人」におけるよりももっと完成された形式で、一つの文章全体、あるいは一つのパラグラフ全体が自由間接話法になっていることが多い。

フローベールにおける半過去の様々な働きはすべて同じ一つの要求から発している。そしてその要求は彼の抱いている小説についての考えから生ずるのであるが、我々は逆に、彼の小説を支配している半過去によって彼の小説観を確認することができる。これらの半過去は次のような点で彼の小説を革新的なものにしている。

第一に外的現実であれ、内的現実であれ、彼の半過去は対象を常に持続の相において捉えているために小説における全く新しい時間の感覚を実現している。プルーストの言い方を借りれば、フローベールは時間からそれに寄生する物語の残りかすを取りはらったのである。

第二に、フローベールの小説はバルザックやスタンダールの小説と同じように三人称で書かれているが、作品を支配している半過去の特殊な性格のために作者の存在と作品の世界との間に独特の関係を生みだしている。フローベールの小説の世界は彼の意識を媒介として我々に伝えられるという構造を我々は確認する。

これらの点によってフローベールは彼から直接出た自然主義の小説よりは二十世紀文学のある傾向と密接に結びついているように思われる。

(註)

- 1) A propos du « style » de Flaubert, 筑摩書房、世界文学大系「プルースト」、p. 326.
- 2) Berlitz, Français, Deuxième Livre, p. 160
- 3) L'Education Sentimentale, Madame Bovary 共に Garnier 版による。
- 4) Lettre à Marcel Proust sur le style de Flaubert, 筑摩書房「プルースト」、p. 338
- 5) Flaubert, Correspondance, t. II, p. 292
- 6) Ibid., p. 86
- 7) Thibaudet, Gustave Flaubert, p. 280

(熊本大学講師)